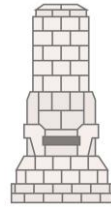


西南之役百四十年恩讐を越えて



宮下 亮善

1

「和尚さん、僕は日本に来るにあたり、西郷隆盛と吉田松陰を勉強して来ました。」「お、それは偉いね、まさに鹿児島は西郷隆盛の生まれ在所、それならば、縁の場所を案内してあげる。」ということで、西郷洞窟、終焉の地、南洲墓地などを案内し最後に城山の西郷銅像前で国道十号を挟んで、記念写真を撮ろうとしたら、彼がきまり悪そうな様子で、西郷銅像を背景に写真を撮ろうとしない。「君は、西郷隆盛を勉強して来たと言ったろう、折角だから、記念写真を撮ってあげるから、そこに立ちなさい。」と勧めても、「いや、い

や」と言っ立とうとしない。「ああ、そうか、征韓論か」と問うたら、「そうです。韓国では、西郷隆盛のことを良く言わない。」「だから、西郷隆盛と一緒に写真を撮ったら大変なことになる。」と彼は写真を撮ることを拒否しました。

「あそうか、君がそこまで言うのであれば、言わせてもらう。なるほど君たち韓国人が西郷隆盛のことを悪くいうのは構わない。それならば君に問うけれど、日本人が君たち韓国人と接して、伊藤博文を暗殺した安重根のことを、批判する日本人は居ない、それはなぜか解るか、それぞれ立場も変われば、考えも変わる。西郷隆盛も安重根も私事の私情でもって事を行ったのではない。国の為という大義名分で身命を掛けた事を理解するから、日本人は安重根を批判しない。あの時代、日本が日清・日露戦争に負けていたら、ロシアの

植民地になっていた。それが当時の国際常識だ。あの明治維新の志士たちは、それこそ命懸けで欧米列強の植民地支配と戦い、日本の近代国家建設の礎を築いた。その先頭に立ったのが西郷隆盛だ。だからこそ、今でも西郷隆盛は多くの日本人に尊敬され、われわれ鹿児島の人間は西郷隆盛を誇りに思っている。」

「君たち韓国人が安重根を誇りに思うように、その心情は何も変わらない。」

今から十数年前、韓国の大学生K君をホストファミリーとして、二週間程生活を共にした時の事です。韓国では西郷隆盛は『征韓論』の首謀者として今でも悪者扱いをされているということ。振り返って、日本の大学生や若者達がどれほどに、西郷隆盛を理解し近現代史を学んでいるのか、鹿児島にしながら西郷隆盛がどんな人物であるのか、心もとな

い昨今です。

このK君は高校の教師として頑張っているとの手紙をもらいましたが、西郷隆盛をどのように生徒達に語るのか、およそ見当がつかず。好むと好まざるとにかかわらず、国際社会は『国民国家』です。『地球市民』という言葉を見聞きしますが、まだまだ、世界はそこまで成熟していません。郷土や国に愛着を持つことは自然な成り行きであり、郷土の偉人に誇りを持つことも大切なことです。そのことは当然ながら、排他的国家主義であってはならないものです。K君は自国の歴史を学び、その過程で『征韓論』を韓国的歴史観で、西郷隆盛や吉田松陰の存在を知り日本に興味を持ったものと思われま

す。日本人は物事を穏便に済ませようという美德があります。それこそ今流行の『付度』でもって、敢えて言うことをしない。しかし外国人との間では通用しません。その場で反論

しないと、相手の言動を暗に認めた事になります。『慰安婦』の問題、『虚構の南京虐殺』の問題、戦後七〇余年にして、未だに彼の国の外交的手駒にされている。隣国の若者達がどのような歴史観をもっているかは、知って置くべきだとおもいます。

西南之役百四十年を語るのに『征韓論』を抜きに語れません。

そもそも『征韓論』とは。――幕末にも欧米列強に対抗する外交攻略として、吉田松陰・橋本左内・勝海舟らによって征韓論が主張され、木戸孝允も中央権力を強化させる施策として征韓の実行を唱えた。明治政府は明治元年（一八六八年）十二月、対馬藩主宗氏をして王政復古を朝鮮に通告させ、中絶していた旧交を復そうとしたが、朝鮮側は書契の形式が旧例に反するという理由で拒んだ。ついで外務省の佐多白茅・森山茂・花房義質ら

が交渉に赴いたが解決しなかった。これは当時国王李熙の父大院君が国政の実権を握り、排外鎖国政策をとっていたからであった。このような韓国の排日策が明治六年に至って征韓論という大きな政治問題となった。

征韓論は留守政府の閣議に上程され、陸海の兵を韓国に出してわが居留民を保護すること、使節を派遣し韓国に直接談判させるとの議案であった。この議案に対し板垣退助は出兵論を主張した。これに対して西郷隆盛は「出兵するよりも責任のある全権使節を派遣して平和的な交渉をなし、それでも韓国が聞き入れない場合は韓国を討つのもよからうと論じ、その使節には西郷を派遣されたらと」希望した。諸参議の多くは西郷の説に賛成し、八月十七日の閣議において西郷を遣韓大使とする。ただしその発表は岩倉大使らの帰朝を待つて行うことにした。ところが岩倉大使一

行が九月帰朝すると、岩倉・大久保らは内地の整備が第一で外征は後にすべしとの理由で反対した。

征韓派、内地派の両派に迫られた太政大臣三条実美は煩悶のすえ病氣となった。これを幸いとした大久保らは『秘策』ありとして宮廷工作を實行し、岩倉右大臣に太政大臣の職務を代行させるようにした。岩倉は明治天皇に征韓論に反対する意見を奏上して勅許を得た。ここにおいて西郷隆盛・板垣退助・後藤象二郎・副島種臣の五参議は岩倉に不満をもつて下野した。

なお『明治六年政変の研究』において毛利敏彦は西郷征韓論の通説を実証的に批判し、また西郷が士族の棟梁であり士族の利害の代表者であるとする通説を批判して、西郷は朝鮮問題の解決が必要だと痛感し自ら交渉にあたって国家的懸案を解決したいと望んだので

ある、としている。――（村野守治著引用）

世にいう西郷征韓論説ではなく、『遣韓使節論』という立場が西郷の本旨であった。

独不適時情　　独時情に適さず

豈聴歎笑声　　豈歎笑の声を聴かんや

雪羞論戰略　　羞を雪がんとして戰略を

論ずれば

忘義唱和平　　義を忘れて和平を唱う

秦檜多遺類　　秦檜の遺類多く

武公難再生　　武公再生し難し

正邪今那定　　正邪今那ぞ定まらん

後世必知清　　後世必ず清を知らん

この漢詩は明治六年（一八七三年）十月に詠んだものである。廟堂の論争について、自らを武公（岳飛）になぞり、反対派を秦檜にたとえ批判している。宋に侵攻した金国と和

を結び、忠臣岳飛を死に追いやり、ついには祖国宋を滅亡させた秦檜の裏切りをたとえて、その非を諫めたものである。この朝鮮問題はどちらが正か邪か今決まるものではない。しかしながら、後の世に必ずどちらが正しかったかわかるであろう。

—文明とは、道の普く行わるるを称賛せる言にして、宮室の莊嚴、衣装の美麗、外觀の浮華を言うに非ず。世人の唱うる所、何が文明やら、何が野蛮やら些とも分からぬぞ。

予嘗て或る人と議論せしこと有り。西洋は野蛮じやと言いかば、否な文明ぞと争う。否な否な野蛮じやと畳みかけしに、何とて夫れ程に申すにやと推せしゆえ、実に文明ならば、未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇々説論して開明に導く可きに、左は無くして未開蒙味の国に対する程むごく残忍の事を致し、己を利するは野蛮じやと申せしかば、其の人

口をつぐみて言無かりきとて笑われける。—
西郷南洲翁の有名な『文化論』である。明治維新は欧米列強の植民地支配に対する国を挙げての抵抗運動であったといえる。

このような大きな時代背景の中、『明治六年政変』がおこる。まさに、明治政府が欧米列強に対峙する外交政策の路線闘争であり、文明観の対立であったといえる。

西郷南洲翁下野後、明治七年台湾征討を閣議決定し、同八年朝鮮西南海岸において軍艦雲揚が江華島守備兵と交戦する『江華島事件』を起こす。この報を聞いた西郷南洲翁は「朝鮮を軽蔑し応砲したことは、天理において恥ずべき所為」と批判したと言われている。明治六年の閣議において、全権使節を派遣し、自らがその使節として朝鮮国に赴き和平を意図した思いとは、おおいに反する事件であった。その結果、明治九年（一八七六年）『日朝

『修交条規』を締結する。この条約は、かつて徳川幕府が欧米列強と結んだ不平等条約そのものであった。これから後、日清・日露戦争をへて、大東亜戦争敗戦まで七〇年間の『分水嶺』が明治六年の政変であったといえる。西郷南洲翁下野後の明治政府は欧米列強の『轍』を結果として踏み行うこととなった。

御仏の 浄光明が とこしえに

護るならまし 南洲の夢

与謝野晶子が昭和四年に鉄幹とともに、南洲墓地を訪れ詠んだものである。思うに『南洲の夢』とは、「道義の普く行われる東亜の和平」ではなかったのか、今日の東アジア情勢を俯瞰するとき、その思いを深くする。『正邪、今那ぞ定まらん、後世、必ず清を知らん。』西郷南洲翁の慧眼今に光るものがある。

西南之役は、明治の近代国家建設途上における国内最後で最大の内戦である。明治六年十月、いわゆる遣韓論に敗れた西郷隆盛の下野により、その端緒を開き、明治十年二月十五日出軍、同十年九月二十四日をもって終焉した。参戦した兵力は、官軍六〇〇〇〇人、薩軍三〇〇〇〇人。両軍合わせて一四〇〇〇余人の戦死者を出した。熊本城の攻防戦、瀬高の大会戦、田原坂の大激戦などが、つとに有名である。日本人同士が、親子が、兄弟が、竹馬の友が、血涙山河を濡らす悲劇的戦いに、あまた有為の人材を失ったこと、今もなお惜しみてあまりある。

回向には 我と人とを 隔つなよ

看経はよし してもせずとも

島津家中興の祖と仰がれる日新公（島津忠

良)の『いろは歌』である。日新公の加世田別府城の戦い、島津義弘の木崎原や島津義久



西南之役錦絵。右は官軍、左は薩軍の絵

の耳川の戦いに続き、島津義弘、忠恒(のちの家久)親子は和歌山の高野山に『朝鮮之役』など、それぞれに敵味方の別なく、『高麗陣敵味方戦死者供養碑』を建立し、戦没者を懇ろに供養した。両軍相对峙した必死の戦いも、互いの奮闘をたたえ、戦没者を敵味方の別なく供養する『博愛慈悲』の精神は、武士道の精華として、感銘を与えている。

明治維新をともしに成し遂げた薩摩人同士が、刺し違ふ悲惨な戦いは遺恨深きものがある。時あたかも、西南之役百四十年にして、南洲翁眠る南洲墓地に『西南之役官軍薩軍恩讐を越えて』の供養塔が建立される。

西郷南洲翁の曾孫西郷吉太郎氏は「恩讐を克服する機会になれば」と。また、大久保甲東翁の曾孫大久保利泰氏は「歴史として捉えるのに、百年以上の月日が必要だったと思う」と話している。当日、このお二人は揃って参

列され、除幕のテープを引き、挨拶をしてい
ただくことになっている。

討つ人も 討たるる人も 味けなや

同じ御国の 人と思へば

勝 海舟

怨を以て怨に報ゆれば、怨は止まず
徳を以て怨に報ゆれば、怨は即ち尽く

最澄

嗚呼！！ 明治十年九月二十四日 秋風巨

星落つ城山 松に古今の色なし

明治十一年五月十四日 大久保利通、島田
一郎等の凶刃に倒れる。

(天台宗大雄山 南泉院住職)



南洲墓地に建立された『西南之役官軍薩軍恩讐を越えて』の供養塔
(平成 29 年 9 月 23 日に除幕)